



Title	ラムの女性が語るライフヒストリー (3)-8
Author(s)	井戸根, 綾子
Citation	スワヒリ&アフリカ研究. 2026, 37, p. 209-219
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/104456
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ラムの女性が語るライフヒストリー (3) - 8

Life History Narratives of Women in Lamu (3) - 8

井戸根 綾子*

IDONE Ayako

0. はじめに

筆者はこれまでケニア・ラム島に生きる女性へのインタビューを重ねており、彼女たちのライフヒストリーを個人ごとにまとめ、日本語訳を加え解説を補足することに取り組んでいる。またその取り組みの中で、女性自身の語りと文化的・社会的背景との関連性に目を向けることを試みている。別稿では調査協力者 C 氏と D 氏のライフヒストリーを紹介しており（井戸根 2012、2015、2016、2017、2018）、本稿の調査協力者 E 氏のライフヒストリーもすでに別稿で紹介している。井戸根（2019）では彼女の祖父母、両親、育ての親について、井戸根（2020）ではきょうだい、少女期に受けた教え、夫とその家族について、井戸根（2021、2022）では求婚、結婚契約式、床入りなど婚礼行事についての語りを取り上げた。さらに、井戸根（2023）では、結婚後の夫との生活と出産について、井戸根（2024）では、夫との死別とその後の服喪について、井戸根（2025）では、実子および親子関係についての語りを紹介した。

本稿では調査当時の E 氏の日常生活に関する語りに焦点を当て、各々に小見出しを振り分けて紹介する。8 回にわたる E 氏のライフヒストリーの紹介は、本稿をもって最終回とする。

1. 調査および調査協力者 E 氏の背景

本稿に関わる聞き取り調査を行ったのは、ケニア共和国の沿岸北部に位置するラム島の中心地ラム（Lamu）である¹⁾。第一次調査は 2003 年 8 月～10 月に、第二次調査は 2004 年 12 月～2005 年 2 月に行い、補足として第三次調査を 2017 年 3 月に行った²⁾。調査地ラムの主な概要は井戸根（2012）を、本稿において登場する地名については井戸根（2019）を参照されたい。

本稿との関連から、井戸根（2019、2020、2021、2022、2023、2024、2025）において語られた E 氏のライフヒストリーを簡単に紹介する。

* 大阪大学大学院人文学研究科（Graduate School of Humanities, The University of Osaka）

¹⁾ 第一次・第二次調査時のラムは行政上、コースト州（Coast Province）ラム県（Lamu District）アム郡（Amu Division）に属していた。しかしケニアでは 2013 年に行政区分としての州・県・郡が廃止され、47 のカウンティを地方行政の中心単位とすることが導入された。現在の行政区分はラム・カウンティ（Lamu County）ラム西・サブカウンティ（Lamu West Sub-County）ムコマニ区（Mkomani Ward）となる。なお各カウンティの領域は、一部を除いて旧行政区分の各県とほぼ一致する。

²⁾ インタビューは調査協力者 E 氏の自宅で筆者自身がスワヒリ語によって行った。録音したインタビューを書き起こした後に E 氏本人に内容を確認し、一部補足説明を受けている。

E 氏の年齢は 2003 年の自己申告によると 40 歳代である。E 氏の両親や母方および父方の祖父母さらに育ての親である女性はいずれも、ラム島の北に位置するパテ (Pate) 島中央部の漁村シユ (Siyu) の出身である。E 氏とその家族、ラム島とパテ島の住人の大多数がムスリムである。

E 氏の母方の祖父は妻子を残してシユを離れ、タンザニア連合共和国のペンバ (Pemba) 島ではクローヴ³⁾関連の仕事に、ザンジバル (Zanzibar) 島では漁業に従事した。その後、祖父はマフィア (Mafia) 島の女性を妻に迎え子どもを 4 人授かる。祖父が亡くなった際は、E 氏はきょうだいとともにマフィアを訪れて喪に服した。

E 氏の母方の祖母は祖父と離婚し別の男性と再婚した。その夫に先立たれた後は、E 氏の母親のもとに身を寄せ一緒に暮らした。

E 氏の母親は 18 歳の頃、船造りの職人である E 氏の父親と結婚する。両親はシユで結婚した後にモンバサ (Mombasa) に移り住み、E 氏が長女として誕生する。生後 2 ヶ月目に入ると E 氏は親戚にあたる女性に引き取られ、ラムで養育される。そのため E 氏が両親と生活をともにした経験はほとんどない。一方で、E 氏の後に誕生した 10 人のきょうだい (弟 6 人、妹 4 人) はモンバサの両親のもとで育った。第一次調査時には 3 人の弟と母親がすでに故人であった。未婚の妹 2 人と暮らしていた父親は、第一次調査時と第二次調査時の間に亡くなっている。

E 氏の養育者である女性には当初夫がいたが、E 氏の養育期に離婚しその後再婚することはなかった。彼女に実子はいなかったが、E 氏の父親を育て上げており、さらにその娘である E 氏も養育している⁴⁾。この女性は長年にわたり行商を行い、自らの収入を得ていた。

初潮を迎えると、E 氏はソモ (somo) ⁵⁾と呼ばれる年配の女性から生理への対処法を学んだ。この女性はその後も E 氏に対して性教育を施す役割を担い、E 氏が結婚を迎える頃には性交渉に関する手ほどきも行った。

彼女が結婚を迎えたのは 10 歳代の前半である。結婚相手である男性 (以下、夫) とその父親はキウンガ (Kiunga) 地方のルブ (Rubu)、母親はファザ (Faza) ⁶⁾の出身である。夫の

³⁾ 和名では丁子。開花直前の蕾を摘み取り乾燥させた後、料理の香辛料や鎮痛剤などの生薬として使用される。クローヴは 19 世紀初頭にザンジバルにもたらされ、その後農園の拡大とともにインド洋交易の主力商品へと成長した (富永 2001:109-110)。1872 年にザンジバルのクローヴがハリケーンによって壊滅して以降、ペンバが主産地として台頭する (富永 2001:200-201)。

⁴⁾ このことから、E 氏は養育者の女性のことをある時には「祖母」、またある時には「母」と呼んでいる。

⁵⁾ 東アフリカで初婚前の娘に対して性教育を行う女性の存在については多くの文献で言及されている (シュトロベール 2006、富永 1994、2001、Brunotti 2005、Fair 2001、Fuglesang 1994、Larsen 2008、Le Guennec-Coppens 1983、Middleton 1992、Mirza and Strobel 1989、Stiles and Thompson(eds.) 2015、Strobel 1979、Timammy 2010)。ラムではソモと呼ばれる女性とその役割を担い、複数の少女が参加する集団に対してではなく個人的に教示を行う。

⁶⁾ パテ島北部に位置する漁村。

父親は農業と漁業で生計を立て、長老会議（mzee wa mui）⁷⁾のメンバーとして地域の相談役を務めていた。キウंगाで暮らしていた彼らだったが、ソマリ⁸⁾の人々の影響を受けラムに移り住むことを余儀なくされた⁹⁾。

タンザニアのダルエスサラーム（Dar es Salaam）で働いていた夫がラムに帰省した際、幼い頃から知る E 氏の成長した姿を見初めて求婚をした¹⁰⁾。E 氏は一般的な額の約 3 倍に相当する¹¹⁾婚資を受け取り、さらに結婚生活に必要な品々も贈られた。養育者の女性は E 氏夫婦の住まいとして自身が所有していた家を提供し、調理器具やアクセサリーを E 氏に贈った。

1 日を費やして婚礼行事が行われ¹²⁾、さまざまな歌や踊りが披露された。早朝に結婚契約式がモスクで執り行われ、モンバサ在住の父親や弟たちが出席した¹³⁾。その日の夜には新婦のお披露目が E 氏宅近くの広場で開かれ、E 氏は緑色のドレスに身を包み招待客に晴れ姿を披露した。その後 E 氏宅の寝室で床入りが行われ新婦の純潔が証明されると¹⁴⁾、女性たちによる歓喜の歌や踊りが広場で夜通し繰り広げられた。初夜をともにした E 氏と夫はそのまま寝室にこもり、E 氏の女性親族などから食事の世話を受けながら数日間過ごした。

結婚後 2 ケ月目になると、夫は仕事のため単身でタンザニアに向かった。トラック運転手として、タンザニア内陸部で採れた淡水魚をザンビア（Zambia）に運ぶ仕事である。まもなく夫がラムに戻ると、夫婦揃ってダルエスサラームへ移り住み新生活を始める。しかし、結婚 6 ケ月目に妊娠が判明し、E 氏が単身でラムに戻る。その後は夫の仕送りを受けながら、養育者の女性のもとで出産を迎えた。

ダルエスサラームでの仕事に行き詰まった夫はラムに戻り、E 氏と暮らし始める。ラムで定職に就くことができなかった夫は、船着き場で荷揚げの仕事をするようになった。夫の稼ぎは十分ではなく、E 氏は養育者の女性に金銭的援助を求めることで生活費を工面した。

⁷⁾ ラムを含む東アフリカ沿岸部の各地には伝統的な自治組織が存在していた（Middleton 1992:69-82、Prins 1967:92-103、1971:12, 18, 48-60）。

⁸⁾ 主にソマリア、エチオピア南部、ケニア北部などに居住し、ソマリ語を母語とするクシ系の民族集団。

⁹⁾ 1963 年 12 月 12 日にケニアはイギリスの植民地支配からの独立を果たしたが、その 2 週間後に政府はケニア北東部に対して非常事態宣言を発令した。この地域のソマリの人々が、ケニアからの分離とソマリアへの編入を求めて分離独立戦争を始めたためである。この戦争はソマリ側の敗北で 1967 年に終結したが、非常事態宣言は 1991 年まで継続された。また 1977-1978 年にはソマリアとエチオピアの間でオガデン戦争が起こり、その後ソマリアの兵士が武器を持ってケニアとの国境を越えた。盗賊化した彼らは強奪などを行い、地域の治安が悪化した（戸田 2013:82-85、2018:552-554）。事態が収束するまでの間にルブを含むケニアおよびソマリア沿岸部の数々の村が被害を受けて避難民が流出したとされる（Nurse 2010:14）。なお、E 氏の夫の家族の数人はその後故郷の土地に再び戻っている。

¹⁰⁾ 夫との明確な年齢差は不明であるが、「夫は自分の親くらいの年齢だった」と E 氏は述べている（井戸根 2020:26）。

¹¹⁾ E 氏の語りによるものである。

¹²⁾ ラムでは主な婚礼行事に費やされる期間は 3 日であることが望ましいとされる。ただし両家の諸事情により日程が短縮されることは珍しくない。

¹³⁾ 結婚契約式はイスラーム法に基づき夫婦間の結婚契約が結ばれる儀式であるが、出席者は男性に限定されている。近親の男性が新婦の後見人として契約を結ぶ。

¹⁴⁾ 女性は初婚を迎えるまで純潔を守るべきであると考えられている。

E氏は3度の妊娠を経験しているが、2人目の子は妊娠5ヶ月目に亡くなっている。残り2度の出産はいずれも病院での帝王切開によるもので、長女N氏と次女M氏が誕生した。

夫を熱病で亡くした際は、服喪の儀式とともに弔問客に施しを行った。通常の服喪に加えて寡婦には約130日間の服喪が課せられ、E氏は質素な服装で入念に肌や髪を覆い隠して自宅の奥の部屋に引きこもった。服喪期間を終えると、身を清めた後に盛装し屋外に姿を現した。集まった家族や友人たちと喪明けの儀式を行い、E氏には数々の贈り物が手渡された。

成長した長女N氏はセカンダリースクール¹⁵⁾を修了し、その後看護師として働き始める。結婚を機にモンバサに移り住み、結婚後も看護師の仕事を続けている。N氏の夫は、ドバイ(Dubai)¹⁶⁾で買いつけた中古車や電化製品を輸入するビジネスを行っている。次女M氏は、セカンダリースクール修了後に、サウジアラビアに住むE氏の妹夫婦を頼ってサウジアラビアに渡航し、働き口を得る¹⁷⁾。成人した2人の娘はそれぞれ職に就き、経済的にもE氏の生活を支えている。未婚者であるM氏の結婚をE氏は気にかけているが、自身の再婚についてはその意志がない。

2. E氏のライフヒストリー

本稿は、基本的に井戸根(2019、2020、2021、2022)の記述形式に従っている。個人名はすべて仮名とし、アルファベット一文字にて表記する。また個人の特定を避けるために、必要な場合には町区などの地名についてもアルファベット一文字にて表記する。実際のインタビューではE氏のライフヒストリーがすべて時系列的に語られたわけではない。第一次調査時と第二次調査時に聞き取った語りをあわせた上で筆者が若干の編集を行い、内容に沿ってそれぞれ小見出しを設けた。2.1は原語であるスワヒリ語での記述であり、2.2は日本語訳に適宜註を付けたものである。

2.1. 原語(スワヒリ語)

調査協力者E氏がインタビューの際に使用しているスワヒリ語にはいわゆる標準スワヒリ語とは明らかに異なる発音や語彙が見られる。しかし同一の単語において、時によって標準スワヒリ語の発音が現れる場合とそうでない発音が現れる場合がある。この現象は語彙に関しても同様であり、標準スワヒリ語の語彙とそうでない語彙が、同じ意味を表すのに混合して使用されている。E氏は人生の大半をラムで過ごしており、彼女が会話において基本とするスワヒリ語はラムで培われたものであると推測される。しかしE氏の主な養育者である

¹⁵⁾ 当時のケニアでは初等学校は8年、セカンダリースクール(中高等学校)は4年の教育期間が基本とされていた。

¹⁶⁾ アラブ首長国連邦最大の都市である。N氏の夫の父方はイエメンからの移民であり、父方の親族にはアラビア半島とアフリカ大陸を行き来しながらビジネスを行う者が複数いる。

¹⁷⁾ M氏本人に仕事内容を確認したところ、首都アブダビで雇用主の子どもの面倒を見ていると説明された。

女性がシユ出身であることから、シユで使用される変種の影響も否めない。またケニアやタンザニアの複数の場所での生活経験がある E 氏の夫からも、何らかの言語的な影響を受けている可能性がある。さらに聞き手である筆者が理解しやすい標準スワヒリ語も時には使用していたと考えられる。E 氏は数種類のスワヒリ語変種を混合して用いていたが、ここではそれを単に「スワヒリ語」と呼ぶ。その表記については標準スワヒリ語の表記法に従っている。

2.1.1. Kazi za nyumbani

Chakula napika mwenyewe, lakini habari ya kukaa nyumbani hiyau nikae na nguo nifue, siwezi kufua tena mimi. Kuna mwenzangu afua, hoyo mjomba wangu. Nitampa mjomba wangu, akinifulia zile nguo. Kazi yake ni ndovi, anawafulia watu nguo wote. Basi nikampatiya zangu akafua. Kama M ule uko hapa pia, anifulia. Kama hivi siku hizi uko, mimi napumzika. M ndiyo apika, anashughulika na kazi za nyumbani sasa. Lakini kama akisha kwenda zake, na mimi naendelea mimi mwenyewe. Napika, nafagiya, nasafisha, nafanya barafu nikapate peni nami. Taabani kweli, nafikiria nipate nsichana.

Sasa nakaa peke yangu hapa nyumbani. Sema wako jirani kina R. Nikiwa na shida, nitakwenda nduu zao N. Wana shangazi yao pia wako. Nikiwaita wanakuya. Ikiwa vile naumwa pengine, wao huya mpaka hapa wanipikie chakula.

2.1.2. Kujiburudisha

Casablanca, kusema hilo kweli bado siyafika, hata sikuyui. Lakini *Zinji* naenda, *Kosti* tena ya hapo zamani, sasa napata mwaka wa kumi na mbili hivi siyafika. Siyapitiya tena *Kosti* lakini hapa *Zinji* naenda. Tikiti shilingi ishirini. Sinema ya kihindi ndiyo napenda mimi. Sinema ya kizungu, kama mimi nzee, hata, sishughuliki nazo. Naenda sinema ya kihindi usiku. Yaanda saa tatu, ndiyo *time* zake. Sasa hutegemea pengine ukanda ukiwa nkubwa mpaka saa sita, unatoka. Kama ukanda ni ndogo, watoka saa tano vile tano na nusu.

Natoka vile saa kumi naenda kuwatembelea marafiki, sehemu za Makadara hoko, kuna Sofaa pia, siku nyingine naenda Bombei siku nyingine naenda hoko Kosti, Mtamuini. Halafu siku nyingine twanenda Shela na jirani yangu natembeatembea, mpaka Shela natembea. Sana naenda Jumamosi, nikashinda hoko. Siku nyingine napanga nikasafiri tukaenda zetu hoko Siu, hoko kwetu, kwetu hasa ambako wamezaliwa wazazi hoko.

2.2. 日本語訳

日本語訳においては、同じ言葉の繰り返しや言い換えなどは簡単な編集を行い、原語通りの訳では理解しがたい部分については若干の言葉を補足している。

2.2.1. 家事

食事は自分で作ってるけど、洗い物をひとまとめにして家で手洗いするのは無理だよ。もう自分で洗濯はできないから¹⁸⁾、洗濯してくれる人がいるんだ。例の母方のおじ¹⁹⁾のことさ。おじに洗濯物を渡したら洗ってくれる。洗濯屋をしてて、みんなの洗濯をしてる。それで私もおじに預けて洗ってもらってるんだ。もし M（次女）が家にいるときだったら、M が洗ってくれる。ここ最近も M がいてくれるから、ひと息つけてるよ。今は M が料理だとかの家事をやってくれてるけど、家を離れてしまったら、私が自分でやってるんだよ。炊事、掃除、それから作った氷を売って小銭を稼ぐのさ²⁰⁾。ほんとにクタクタでね、家事手伝いの子を置こうかと考えてるところさ。

今はこの家に一人で暮らしてる。まあ、近所に R（友人）たちがいてくれるからね。困ったことがあったら N（長女）のいところや親戚²¹⁾を頼るし。その親戚にも父方のおばがいるから、お願いしたら来てくれる。たとえば私が病気になったりしたら、ラムにまで来てくれて食事の世話もしてくれる。

2.2.2. 娯楽

カサブランカ上映館²²⁾は、正直言ってまだ行ったことがないし、どこにあるのかも知らないね。だけどジンジ・シネマ²³⁾には行くよ。それから、コースト・シネマ²⁴⁾っていうのも昔あったね。もう 12 年くらい行ってない。コースト・シネマにはもう行ってないけど、ジンジ・シネマには行くよ。チケットは 1 枚 20 シリング²⁵⁾。インド映画が好きなんだ²⁶⁾。洋画は

¹⁸⁾ ラムの家庭における洗濯機の設置率は低い。

¹⁹⁾ 自宅の一部屋を間貸している。妻帯者ではない。

²⁰⁾ 冷凍庫の普及率が低いラムでは、氷は必要な際にその都度購入することが多い。冷凍庫を所有している家庭は、水道水を凍らせて販売する。原液シロップを水に溶かし凍らせたものを氷菓子として販売することもある。なお、水道についても各家庭に設置されているわけではない。

²¹⁾ E 氏の弟妹（計 10 人）の実子などを指している。弟妹やその家族の多くはモンバサ在住であり、同じくモンバサに暮らす N 氏は普段から交流がある。

²²⁾ 一般家屋の一室に設置されたスクリーンにビデオテープ、DVD、国際衛星放送の映像を上映する施設が 1990 年代に現れはじめた。収容可能人数は 20-40 人程度と小規模であるが、後述される映画館よりも上映される映像の種類が多い。映画鑑賞の他にサッカーの試合観戦も可能で、当時は男性若年層を中心に人気を集めていた。

²³⁾ メインストリート沿いに 1970 年代前半に開かれ、約 400 人が収容可能な映画館である。1991 年には改修工事のために一時閉館、その後営業を再開する。2026 年現在は映画館ではなくレストランとして営業されている。テレビ、ビデオ・DVD プレーヤー、携帯電話、スマートフォン、インターネットなどの普及により映像や音楽を楽しむ方法が多様化したことは、映画館に足を運ぶ人々が減少した一因であると言える。

²⁴⁾ かつてテニスコートとして使用されていた街外れの敷地で、1960 年代から映画の野外上映が行われていた。1998 年頃に上映が停止されており、E 氏からこの語りを聞き取った時点ではすでに閉業していた。

²⁵⁾ 本稿でのシリングは、ケニアの通貨であるケニア・シリングを指す。E 氏へのインタビューの主な実施時期である 2003 年 8 月、2004 年 12 月の為替状況はともに 1US ドルが約 75 シリングであった。質や種類にもよるが、当時の砂糖 1 キログラムの価格は約 50-60 シリングであった。

²⁶⁾ 年齢を問わず、ラムではインド映画を好む女性が少なくない。ラムで上映されるものには字幕や

ね、私みたいなばあさんは興味ないね。インド映画は夜間に見に行くよ。午後 9 時から始まるんだ。開始はその時間って決まってる²⁷⁾。その時によるんだけど、上映時間が長いと夜の 12 時まで鑑賞して帰る。上映時間が短ければ 11 時とか 11 時半に映画館を出るんだ。

外出っていうと、午後 4 時頃に出かけて友人宅を訪ねることかな²⁸⁾。あっちの方のマカダラ (Makadara) とかソファア (Sofaa) にも行くし、ボンベイ (Bombei) に行く日もあれば、コースト (Kosti) やムタムイニ (Mutamuini) に行く日もある²⁹⁾。それから、近所のみんなとシェラ (Shela)³⁰⁾まで出かけることもある。シェラまでてくてく歩いていくんだ。たいていは土曜日に行って、そこで一日過ごす。みんなでシユ (Siu) に泊りがけで行くこともあるよ。両親が生まれた土地で、私らの故郷だからね。

3. おわりに

本稿では、2 人の娘がそれぞれラムを離れた後の自身の日常生活に関する E 氏の語りを紹介した。以下では本稿での彼女の語りにおいて注目すべき点を述べつつ、別稿での彼女の語りについてもふりかえる。

E 氏は夫との死別後に再婚をすることなく、娘たちの援助を受けながら生計を立てていることを繰り返し語っている。ここでケニアにおける寡婦・寡夫に関する統計を確認したい。表 1、表 2 は、各年齢層における婚姻状況を男女別に示したものである。配偶者・パートナーの有無について男女を比較すると、34 歳に達するまでは男性よりも女性の方が配偶者・パートナーを有している割合が多い。しかしその割合は 35 歳以上になると男性が女性を上回り、その差は年齢層が上がるにつれて大きくなる。女性の場合はどの年齢層においても割合は 70%を超えるかそれに近い数字であり、大きな変化はない。一方男性は、年齢層が上がるにつれて割合は上昇し、45-49 歳代には約 9 割の男性が配偶者・パートナーを有している。

次に、寡婦・寡夫の割合を比較する。すべての年齢層において、寡婦の割合は寡夫を上回

吹替は施されていないが、話の流れは映像を見るだけでも理解しやすく、華やかな装飾、壮大な歌や踊り、豊かな愛情表現、派手なアクションシーン、ドラマチックなストーリー展開などを理由に人気を集めていた。

²⁷⁾ 通常の上映時間は午後 9 時からとされ、週に 1 度の女性客限定の営業日にのみ、日中上映が行われていた。主な上映時間が夜間であったのは、映画館という閉鎖空間で男女が席を同じくすることへの抵抗感を薄めるために、姿の見えにくい暗い時間帯があえて選ばれたと言われている。また、映画館には十分な空調設備が整っていないため気温の上がる日中は避けられたこと、野外上映のコースト・シネマが夜間のみの営業だったためラムでは夜間の映画鑑賞が一般化していたこと、なども理由として挙げられる。なお、ラムの映画館では、ムスリム女性はブイブイを着用したまま鑑賞する。ブイブイとは、ムスリム女性が身体を覆い隠すために外出時に着用するガウン状の黒い長衣である。

²⁸⁾ 外出する際は、日差しの弱まる夕刻から日没までの時間帯が好まれる。

²⁹⁾ いずれもラムの中心地やその近郊の町区名が言及されている。前述のコースト・シネマがあった付近は、それに由来してコーストと呼ばれている。

³⁰⁾ ラムの中心地から南に 3 km ほど離れた村である。穏やかな海と美しいビーチが観光客を魅了し、多くの宿泊施設が建設されている。観光客が訪れるようになる以前から、ラムの人々は余暇を楽しむためにシェラに足を運び、ビーチでピクニックなどを行っている。

っている。男女の差は年齢の上昇とともに広がり、E氏が該当する45-49歳の年齢層では、寡夫が1%台であるのに対して、寡婦は10%を超えている。

表1. 各年齢層における女性の婚姻状況の割合（%）

年齢層		25-29	30-34	35-39	40-44	45-49
既婚・同棲	2014 年	74.7	79.1	76.7	72.5	71.6
	2022 年	71.4	76.3	75.0	72.8	68.9
寡婦	2014 年	1.9	3.3	5.6	10.7	14.0
	2022 年	0.9	3.3	5.3	7.0	11.9
その他 ³¹⁾	2014 年	23.4	17.6	17.7	16.8	14.5
	2022 年	27.9	21.6	19.6	20.1	19.2

（Kenya National Bureau of Statistics 2015:56、2023:134）

表2. 各年齢層における男性の婚姻状況の割合（%）

年齢層		25-29	30-34	35-39	40-44	45-49
既婚・同棲	2014 年	57.1	78.3	86.1	89.9	90.8
	2022 年	51.2	73.9	83.5	83.7	89.5
寡夫	2014 年	0.1	0.6	1.3	0.5	1.6
	2022 年	0	0.1	0.4	1.6	1.8
その他	2014 年	42.8	21.1	12.6	9.6	7.5
	2022 年	48.8	26.1	16.1	14.6	8.8

（Kenya National Bureau of Statistics 2015:56、2023:134）

これらはケニア全体の集計結果であり、単純にラムの状況に当てはめることはできないが、E氏を含む複数の住人が、ラムでは寡夫よりも寡婦の方が多いと認識している。ラムにおいても寡婦がより多いとすると、その要因は幾つか考えられる。

E氏はラムで一時期蔓延した熱病により夫を亡くしているが、そのときについて、同じ熱

³¹⁾ 寡婦と寡夫の割合を比較することが主な目的であるため、未婚、離婚、別居などの理由で配偶者がいない、あるいはほぼいないとみなされる状況を、その他として一つの項目にまとめている。

病で配偶者を亡くしたのは女性の方が多かったと彼女は記憶している（井戸根 2024:257）。女性の方が配偶者に先立たれる可能性が高いと考えられることには、夫婦間の年齢差が少なからず影響していると言える。ラムでは、妻が夫よりも年長者であることは一般的ではなく、E 氏自身も、註記 10 にあるように、夫とは親子ほどの年齢差があったと語っている。前述の調査協力者 C 氏や D 氏の両者についても、どの夫も彼女たちより年上であり³²⁾、初婚の相手は 10 歳以上の年齢差があったと語られている（井戸根 2012:30、2016:88）。さらに D 氏は、「夫は妻よりもある程度年長であるべきだ。相手が成熟した男性であれば落ち着いた夫婦関係を築くことができる」と主張している（井戸根 2017:62）。

寡婦や寡夫は、つまり配偶者との死別後に再婚をしていないということである。死別後の再婚に着目すると、男女ともに、年齢を重ねるにつれて再婚の可能性は低くなる。ただし、男性が十分な経済力を有していれば、たとえば 50 歳以上であっても妻を娶ることは可能だと一般的に考えられている。しかし女性が 50 歳に達した場合、求婚を受ける可能性はきわめて低いとみなされ³³⁾、年齢の影響をより大きく受ける。

E 氏は 40 歳代であるが、「夫に先立たれた身であるが再婚はしないし、今後もそのような意志はない」と繰り返し語っており、夫を持つ生活と持たない生活を比較した上で、再婚をしないという結論を出している（井戸根 2025）。とは言え、生活費の工面、家事の遂行、体調不良の際などさまざまな場面において、2 人の娘、きょうだい、親戚、隣人など、夫以外の人々の助けを借りることで、彼女の生活は成り立っている。E 氏のように子どもたちはすでに成人し配偶者に先立たれた女性は、出産、育児、夫の世話といった「女性としての役割」を果たし終えたとみなされ、周囲の者が養い援助する対象となる。そのことを当事者である女性も当然のこととして受け止める。「生活費を稼ぐことは男性の役割である」という考え方が一般的であるラムにおいて、男性は同じような環境にある女性に比べて周囲の庇護を受ける対象にはなりにくい。その点においては寡夫よりも寡婦の方が、配偶者を持たずに生活する上での負担が軽減されていると言えるのかもしれない。

最後に、一夫多妻制についても触れておきたい。男性が複数の妻を有している場合、1 人の妻が亡くなっても別の妻が存命であれば、統計上その男性は寡夫とはみなされない。寡婦と寡夫の割合を比較する際には、このことも考慮に入れておくべきだろう³⁴⁾。

³²⁾ 第一次調査時の自己申告による年齢は、C 氏が 60 歳代、D 氏が 70 歳代である。両者ともに 3 度の結婚経験がある。

³³⁾ ラムでは、求婚は女性に対して男性からなされるものであるとされている。

³⁴⁾ ただし、ラムで一夫多妻が慣行として頻繁に行われているわけではない。第一次・第二次調査時には結婚経験のある女性 30 人にインタビューを行っているが、僚妻を持った経験があると答えたのは 4 人である。2022 年に実施された人口動態調査によると、ラム・カウンティの 15-49 歳の既婚女性のうち僚妻がいると答えた回答者は 14.9%である（Kenya National Bureau of Statistics 2023:138）。同調査において、ラム・カウンティの 15-49 歳の既婚男性のうち複数の妻と婚姻を結んでいると回答したのは 6.5%である（Kenya National Bureau of Statistics 2023:140）。

参考文献

- 井戸根綾子. 2012. 「ラムの女性が語るライフヒストリー (1)」『スワヒリ&アフリカ研究』第 23 号, 23-47.
- . 2015. 「ラムの女性が語るライフヒストリー (2) -1」『スワヒリ&アフリカ研究』第 26 号, 79-98.
- . 2016. 「ラムの女性が語るライフヒストリー (2) -2」『スワヒリ&アフリカ研究』第 27 号, 82-100.
- . 2017. 「ラムの女性が語るライフヒストリー (2) -3」『スワヒリ&アフリカ研究』第 28 号, 56-71.
- . 2018. 「ラムの女性が語るライフヒストリー (2) -4」『スワヒリ&アフリカ研究』第 29 号, 121-134.
- . 2019. 「ラムの女性が語るライフヒストリー (3) -1」『スワヒリ&アフリカ研究』第 30 号, 49-66.
- . 2020. 「ラムの女性が語るライフヒストリー (3) -2」『スワヒリ&アフリカ研究』第 31 号, 17-34.
- . 2021. 「ラムの女性が語るライフヒストリー (3) -3」『スワヒリ&アフリカ研究』第 32 号, 67-82.
- . 2022. 「ラムの女性が語るライフヒストリー (3) -4」『スワヒリ&アフリカ研究』第 33 号, 101-118.
- . 2023. 「ラムの女性が語るライフヒストリー (3) -5」『スワヒリ&アフリカ研究』第 34 号, 88-104.
- . 2024. 「ラムの女性が語るライフヒストリー (3) -6」『スワヒリ&アフリカ研究』第 35 号, 251-264.
- . 2025. 「ラムの女性が語るライフヒストリー (3) -7」『スワヒリ&アフリカ研究』第 36 号, 99-113.
- シュトローベル、マーガレット (富永智津子訳). 2006. 「東アフリカ沿岸部における奴隷制と女性」富永智津子、永原陽子編『新しいアフリカ史像を求めて』第 6 章, 191-220. 御茶の水書房.
- 戸田真紀子. 2013. 「民族的少数派の抑圧と植民地化の遺産ーケニア共和国北東州の事例を中心としてー」月村太郎編『地域紛争の構図』第 3 章, 75-96. 晃洋書房.
- . 2018. 「テロを生み出すもの: 「我が家」を奪われたケニア北東部のソマリ人歴史を事例として」『關西大學經濟論集』第 67 卷 4 号, 541-562.
- 富永智津子. 1994. 「ザンジバルの女性と文化ー成女儀礼・踊りと歌」『キリスト教文化研究所研究年報』第 27 号, 73-100.
- . 2001. 『ザンジバルの笛ー東アフリカ・スワヒリ世界の歴史と文化ー』未來社.

- Brunotti, Irene. 2005. "Ngoma ni Uhuni? Ngoma za Kisasa Mjini Zanzibar" *Swahili Forum*, 12, 161-171.
- Fair, Laura. 2001. *Pastime & Politics*. Athens, Ohio University Press.
- Fuglesangu, Minou. 1994. *Veils and Videos -Female Youth Culture on the Kenya Coast*. Stockholm, Stockholm Studies in Social Anthropology.
- Kenya National Bureau of Statistics. 2015. *Kenya Demographic and Health Survey 2014*.
- . 2023. *Kenya Demographic and Health Survey 2022 Volume I*.
- Larsen, Kjersti. 2008. *Where Humans and Spirits Meet - The Politics of Rituals and Identified Spirits in Zanzibar*. New York and Oxford, Berghahn Books.
- Le Guennec-Coppens, F. 1983. *Les Femmes Voiles de Lamu, Kenya*. Paris, Editions Recherche Sur les Civilizations.
- Middleton, John. 1992. *The World of the Swahili- an African Mercantile Civilization*. New Haven and London, Yale University Press.
- Mirza, Sarah and Strobel, Margaret. 1989. *Three Swahili Women*. Bloomington, Indiana University Press.
- Nurse, Derek. 2010. *Bajuni: people, society, geography, history, language*. Memorial University. <https://www.mun.ca/linguistics/media/production/memorial/academic/faculty-of-humanities-and-social-sciences/linguistics/media-library/more/e-books/Bajuni%20database.pdf> (2026 年 2 月 10 日最終閲覧)
- Prins, A. H. J. 1967. *Swahili-Speaking Peoples of Zanzibar and the East African Coast*. London, International African Institute.
- . 1971. *Didemic Lamu*. Groningen, Instituut voor Culturele Anthropologie der Rijks Universiteit.
- Stiles, Erin E. and Thompson, Katrina Daly (eds.). 2015. *Gendered Lives in the Western Indian Ocean*. Athens, Ohio University Press.
- Strobel, Margaret. 1979. *Muslim Women in Mombasa 1890-1975*. New Haven, Yale University Press.
- Timammy, Rayya. 2010. *Mombasa Swahili Women's Wedding Songs*. Saarbrücken, VDM Verlag Dr. Muller GmbH & Co. KG.

Namshukuru Bi. E ambaye alinisaidia kwa utafiti wangu na kunialika nyumbani kwake kwa hisani yake. Familia, marafiki na majirani yake pia ninawatolea shukrani zangu.